寄稿

日本という国家の起源について

── 飛鳥の史跡を訪ねて

田中 辰明
お茶の水女子大学名誉教授

序文

大和王朝という言葉は、日本という国家の起源をめぐる問いを内包しながら、同時にその輪郭の曖昧さをも示している。王朝とは本来、明確な創始の瞬間をもつものとして理解されがちであるが、古代日本においては、その成立はむしろ緩やかな過程として進行した。神話と歴史、伝承と考古資料が重なり合うなかで、王権は次第に姿を整えていく。本稿では、その曖昧な起点に目を向けながら、大和王朝がいかにして形成されていったのかを考察する。

1．大和王朝

大和王朝の発足をめぐる問題は、日本という国家のはじまりをどのように捉えるかという、きわめて根源的な問いを含んでいる。だがその起点は、明確な一瞬として捉えられるものではない。むしろそれは、霧の中から次第に輪郭を現してくる山並みのように、緩やかな時間の推移の中で形成されていったものである。

その中心となったのは、現在の奈良盆地であった。三方を山に囲まれたこの地に、いくつもの小さなクニが併存していた時代、やがてその中から他を凌駕する勢力が現れる。3世紀後半から4世紀にかけて、各地の首長たちを束ねるようなかたちで、一つの政治的中心が生まれていったのである。

その変化を、最も雄弁に物語るのが古墳である。とりわけ箸墓古墳に代表される初期の巨大前方後円墳は、単なる墓ではない。それは、動員された労働力の規模と、死者に付与された象徴的権威とを通じて、新たに成立しつつあった王権の姿を地上に刻みつけた記念碑であった。

同時に、日本列島は孤立していたわけではない。中国の史書『魏志倭人伝』に記された卑弥呼の名は、倭という存在がすでに外部の視線の中にあったことを示している。邪馬台国と大和王権の関係についてはなお結論を見ないが、少なくともこの時代、列島内の政治的統合と対外関係は、互いに影響を及ぼし合いながら進行していたと考えられる。

こうした流動的な状況の上に、後世、「王朝」と呼ばれるものが立ち現れる。しかしその起源を、系譜の冒頭に置かれた神武天皇に求めることはできない。『古事記』や『日本書紀』に描かれる神武は、天上の神々に連なる血統を帯び、紀元前という遥かな過去に位置づけられた存在である。それは歴史的人物というよりも、王権の正統性を語るために構想された象徴的始祖と見るべきであろう。

神武の後に続く、いわゆる「欠史八代」もまた沈黙に包まれている。名と系譜のみが伝えられ、具体的な事績を欠くこれらの天皇たちは、歴史の連続性を整えるために後から配置された影のような存在である。

しかし第10代の崇神天皇に至ると、叙述はにわかに具体性を帯びる。疫病の流行、反乱の鎮圧、各地への将軍の派遣――そこには、単なる神話ではなく、統治の現実を思わせる手触りが現れてくる。考古学的にも、ちょうどこの頃、奈良盆地を中心に巨大古墳が連続的に築かれ、強大な首長権力の存在が裏付けられる。崇神という名が、そのまま特定の個人を指すかどうかは別として、少なくともこの時代に「王」と呼ぶにふさわしい存在が現れたことは疑いない。

こうして見れば、大和王朝の発足とは、神話的時間から歴史的時間へと移行する、その境界に生じた現象であったと言えるだろう。神々の系譜として語られた起源は、やがて土と石によって築かれた古墳へと姿を変え、さらに具体的な政治の記録へと接続されていく。

王朝とは、ある日突然に始まるものではない。それは、語られる物語と、地上に残される痕跡とが、長い時間をかけて重なり合うところに、ようやく立ち上がってくるのである。

2．大和王朝と古墳

日本列島における国家の萌芽を語ろうとするとき、大和王朝と古墳は、互いに影のように寄り添いながら立ち現れてくる。古墳とは、単なる死者のための土の塚ではない。それはむしろ、目に見えぬ権力の輪郭を大地の上に刻みつけた、ひとつの巨大な「かたち」であった。そこには、王権の成立と拡大、そしてやがて変質してゆく過程が、沈黙のうちに語り込まれている。

三世紀後半から七世紀にかけて築かれたこれらの墳墓は、今日「古墳時代」と呼ばれる時間の層を形づくっている。とりわけ前方後円墳と呼ばれる特異な形態は、単なる埋葬の機能を超え、王あるいはそれに比肩する首長の存在を象徴的に示す装置であったと考えられている。

大和王朝は、奈良盆地を中心に成立したとされるが、その歩みは古墳の築造とほとんど重なり合っている。たとえば箸墓古墳のような初期の巨大古墳は、王権の誕生と不可分の関係をもって出現する。古墳が姿を現すとき、そこにはすでに、それを築きうるだけの統率力と動員力を備えた権力が存在していたのである。

やがて古墳は、その規模と分布によって王権の実像を語りはじめる。たとえば大仙古墳に見られる圧倒的な墳丘は、膨大な労働力の集積なしには成立しえない。それは単に一人の死者のためというよりも、広域に及ぶ支配の網の目を示す証左であろう。また、各地に点在する古墳群は、中央の王と地方の首長たちとが、対立ではなく、緩やかな結びつきのなかで秩序を形づくっていたことを示唆する。そこでは埴輪や鏡、武器といった副葬品が共通の様式を帯び、文化そのものが王権のもとに統合されていった。

このようにして近畿から始まった古墳の営みは、やがて列島各地へと波紋のように広がってゆく。前方後円墳という統一された形式が遠隔地にまで及ぶという事実は、目に見えぬ政治的影響力が、確かにそこまで届いていたことを静かに物語っている。

しかし七世紀に入ると、その風景は急速に変わる。巨大古墳は姿を消し、墳墓は小型化し、やがて築かれなくなる。そこには、律令国家の形成や仏教の浸透、そして天皇を中心とする新たな秩序の成立といった、社会の深い変動が横たわっている。かつて土を盛り上げることで可視化されていた権力は、制度と理念のなかへと移行し、もはや同じかたちを必要としなくなったのである。

古墳とは、したがって、過ぎ去った時代の遺構であると同時に、国家がまだ輪郭を定めきれなかった時代における、もっとも雄弁な表現であった。大地に刻まれたその沈黙の造形は、大和王朝という存在のあり方そのものを、今なお私たちに問いかけている。

3．石舞台古墳

飛鳥の野に立つとき、まず目に飛び込んでくるのは、むき出しの巨石が織りなす異様な構築物である。石舞台古墳――それは、もはや単なる古墳というより、地表に露出した「権力の骨格」とでも呼ぶべき存在である（写真1～3）。

この古墳は、7世紀初頭、すなわち飛鳥時代の幕開けに築かれたと考えられている。もとは土に覆われた墳丘を有していたが、長い歳月のうちに封土は失われ、いまでは巨大な花崗岩の石室のみが露わとなった。積み上げられた石の総重量は2,300トンに達するとされ、その圧倒的な量感は、築造に動員された労力と組織力の大きさを雄弁に物語る。内部に足を踏み入れることのできる数少ない古墳のひとつであることも、この遺構に独特の現実感を与えている。7世紀の初頭にわが国には非常に優れた土木建築技術が存在していたことが伺われる。

被葬者として最も有力視されているのは、飛鳥の政局を主導した権力者、蘇我馬子である。もしこの推定が正しければ、この石の塊は単なる墓ではなく、中央政権の威信を可視化した記念碑にほかならない。「石舞台」という名もまた、露出した天井石が舞台のように見えることに由来し、その呼称自体がすでに視覚的な印象の強さを物語っている。

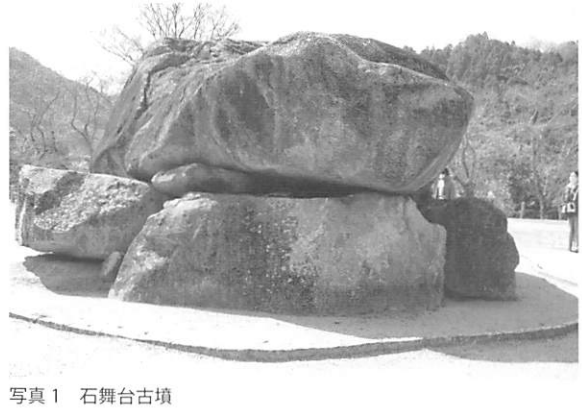

写真1　石舞台古墳

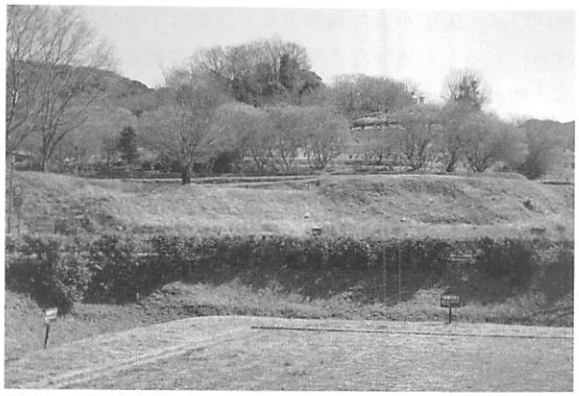
写真２　石舞台古墳周辺景色

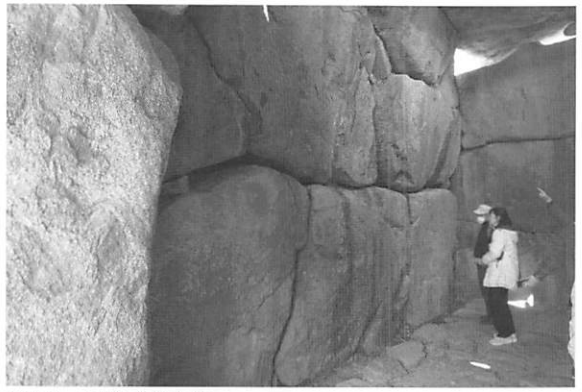
写真３　石舞台古墳内部

写真４　キトラ古墳と筆者

４．キトラ古墳

これに対して、同じ奈良県内に所在するトキラ古墳は、知名度においては石舞台に及ばないものの、地域社会の実像を伝えるうえで見逃すことのできない遺構である。横穴式石室を備える点では共通するが、その規模はより抑制され、むしろ石材の積み方や構造の細部に、この地に根ざした技術や様式が息づいている。被葬者は地方の有力者とみられ、中央とは異なる権力のあり方を示唆している。築造年は７世紀末から８世紀初頭とされている（写真４）。

この二つの古墳を並置するとき、そこに浮かび上がるのは、古墳時代後期における社会の多層性である。すなわち、一方には中央集権化を推し進める巨大な政治権力があり、他方には地域ごとに自律的な基盤をもつ豪族たちの世界が広がっていた。石室の規模や構造の差異は、単なる技術的条件の違いではなく、そうした身分秩序と権力構造の差を、そのまま物質として刻み込んだものにほかならない。

石舞台古墳が示すのは、国家形成へと向かう時代の頂点における力の集中であり、キトラ古墳が語るのは、その裾野に広がる地域社会の現実である。両者をあわせて眺めるとき、古墳とは単なる死者の記念ではなく、生者の社会構造そのものを映し出す鏡であったことが、静かに、しかし確かに理解されてくるのである。

石舞台古墳の上で狐が天女に化けて舞ったとの言い伝えがある。「舞台」という名称はこの伝説からきているという。

５．キトラ古墳の壁画

奈良・明日香の地にひっそりと佇むキトラ古墳は、その小さな墳丘の内部に、壮大な宇宙を宿している。石室の壁と天井に描かれた一連の壁画は、単なる装飾の域を

超え、古代人の世界観と死生観を結晶させた総合的な図像体系として、今日にまで静かに語りかけてくる。

その構成は明快でありながら、きわめて象徴的である。すなわち、四神、十二支像、天文図、そして太陽と月――この五つの主題が、石室という閉ざされた空間の内部に緻密に配置されている。

まず目を引くのは、四壁を守護する四神である。東に青龍、南に朱雀、西に白虎、北に玄武。中国古来の思想に基づくこれらの神獣は、天の四方を司る存在として、空間そのものに秩序を与える。特筆すべきは、この四神がすべて揃って確認された例が、日本においてはこの古墳に限られるという点であろう。ここにおいて墓室は、単なる埋葬の場ではなく、方位によって厳密に構成された宇宙の縮図へと変貌する。

四神の下方には、さらに興味深い像が展開する。十二支である。子から亥に至るまで、獣の頭を戴いた人身像として描かれたこれらの存在は、方位と時間の双方に対応し、世界の循環的秩序を象徴している。空間を司る四神に対し、十二支は時間の流れを担う。そこには、時と方位が不可分に結びついた、東アジア的宇宙観の精緻な反映を見ることができる。

そして、天井に描かれた天文図は、この石室の思想的核心といってよい。赤道や黄道を示す円環構造のもとに、星々が配置されたこの図は、中国の本格的天文学に基づく高度な知識の産物であり、現存する世界最古級の星図の一つとされる。閉ざされた地下空間にあって、なお天空の広がりを精密に写し取ろうとしたその意志には、古代人の宇宙への深いまなざしが宿っている。

さらに、天井の東西には、金箔で表された太陽と、銀箔で象られた月が配されている。これは昼夜の交替、すなわち時間の循環を象徴するものであり、四神や十二支、天文図と呼応しながら、この空間に絶えざる運行のリズムを与えている。

こうして見てくると、この壁画群が単なる美的装飾ではないことは明らかである。四神が空間を定め、十二支が時間を刻み、天文図が宇宙の構造を示し、日月がその循環を司る――それらが一体となって、石室内部に「小宇宙」を構築しているのである。被葬者は、この秩序の中に包み込まれることで、永遠の存在として宇宙に位置づけられる。そこには、死を終焉ではなく、宇宙的秩序への帰還として捉える思想が透けて見える。

また、この壁画は文化史的にもきわめて重要な意味を持つ。そこには、中国や朝鮮半島の壁画古墳文化の影響が色濃く認められ、同時に、飛鳥時代の日本が国際的な文化交流の中にあったことが如実に示されている。加えて、当時すでに高度な天文学的知識が受容されていた事実は、古代国家形成期の知的水準の高さを物語るものであろう。

キトラ古墳の壁画は、墓室という閉ざされた空間に描かれた一個の宇宙である。それは、死後の世界を視覚化した象徴体系であると同時に、古代日本がいかにして外来の知を取り込み、自らの思想として再構成したかを示す、静かな証言でもある。この古墳は我が国に７世紀末に優れた建築仕上げ技術が存在したことの証言でもある。

6．大和王朝と聖徳太子の業績

大和王朝の形成と発展を語るとき、聖徳太子という存在は、ひとつの象徴として静かに立ち現れてくる。彼は単なる皇族ではなかった。むしろ、未だ輪郭の定まらぬ統治のかたちに思索を与え、それを現実の制度へと引き寄せようとした、稀有な思想家であり、同時に現実政治に深く関わった実務家でもあった。

五世紀から七世紀にかけて、大和王朝は列島の統合を進めつつあったが、その内実はなお脆く、各地の豪族たちの結びつきに依存する、緩やかな連合体にすぎなかった。権力は分有され、統治は血縁と地縁に支えられていたのである。

そうした時代の只中にあって、聖徳太子は推古天皇の摂政として政務を担い、王権のあり方に静かな、しかし決定的な転換をもたらそうとする。豪族の合議に依拠した政治から、天皇を中心とする秩序へ。血縁による支配から、制度によって支えられる統治へ。その移行は一挙に成し遂げられたわけではないが、彼の構想は、確かに時代の底流を変え始めていた。

その試みの具体的なかたちのひとつが、603年に定められた冠位十二階である。ここでは、家柄ではなく個々の能力と功績に応じて官位が授けられる。世襲の力を緩やかに解体し、秩序を個人の資質へと結び直すこの制度は、のちの官僚制の萌芽として、静かに根を下ろしていく。

翌年に示された十七条憲法は、さらに異なる位相から国家の骨格に触れている。それは近代的な意味での法典ではなく、むしろ統治に携わる者たちの内面を律する規範であった。「和を以て貴しとなす」という一句に象徴さ

れるように、そこには仏教や儒教に由来する倫理観が織り込まれ、政治の技術というよりは、政治を支える精神の調律が試みられている。

また、太子は仏教を単なる信仰としてではなく、国家の精神的基盤として位置づけた。法隆寺や四天王寺の建立は、その象徴的な結実である。大陸からもたらされた思想と技術は、これらの寺院を媒介として定着し、やがて列島の文化の深層に浸透してゆく。そこには、外来のものを受け入れながら、自らの秩序を編み直そうとする意思が見てとれる。

さらに607年、隋への遣使は、外交というかたちで国家の自覚を外へと開く契機となった。「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す」という国書の文言は、単なる修辞を超えて、自らを一個の主体として位置づけようとする強い意志の表明であった。そこには、巨大な文明圏に対峙しつつも、対等であろうとする静かな矜持が宿っている。

これら一連の試みは、制度、思想、そして外交という三つの次元において、大和王朝を緩やかな連合体から、より統合された「国家」へと導こうとする運動であった。聖徳太子の仕事は、完成を見ることなく後代へと引き渡されたが、その余韻は律令国家の成立へと確かに連なっていく。

未だ名を持たぬかたちに名を与え、散在する力に秩序を見いだそうとしたその営為のうちに、日本という国家の原型は、かすかな輪郭を帯び始めていたのである。

7．橘寺

奈良県明日香村にある橘寺は、日本仏教史の黎明期を語るうえで欠かすことのできない古刹であり、とりわけ聖徳太子との深い結びつきによって知られている（写真5～8）。

橘寺は、伝承によれば聖徳太子の生誕地に建てられた寺院とされ、その創建は7世紀初頭にさかのぼるといわれる。寺名の「橘」は、太子の母である穴穂部間人皇女が、この地にあった橘の木にちなみ名づけたとも伝えられている。現在の伽藍は後世の再建だが、飛鳥の地における仏教受容の象徴的な場として、その歴史的意義はきわめて大きいものがある。

橘寺の本尊は「太子如来」と呼ばれる像で、聖徳太子を如来として表現した特異な存在である。これは、太子が単なる政治的指導者にとどまらず、宗教的・思想的権威としても崇敬されてきたことを物語っている。また、境内には「二面石」と呼ばれる石造物があり、人の善悪二面性を象徴するものとして知られ、飛鳥文化の精神性を今に伝えている。

聖徳太子は、日本における仏教の保護者として知られ、冠位十二階や憲法十七条の制定など、国家体制の整備に

写真5　「聖徳太子誕生の地」の石碑（橘寺入り口）

写真6　橘寺山門

写真7　橘寺

写真8　橘寺「二面石」

写真9　飛鳥寺山門

尽力した人物である。橘寺は、その思想と信仰の原点を象徴する場所であり、太子の人間像を理解するうえでも重要な意味を持つ。

このように橘寺は、単なる古寺ではなく、古代国家の形成と仏教思想の受容が交錯する場として、歴史的・文化的にきわめて豊かな意義を有しているのである。

8．飛鳥寺

奈良・明日香の静かな地に佇む飛鳥寺は、日本における本格的寺院の嚆矢とされ、古代国家の胎動を今に伝える象徴的な存在である。その創建の背景には、仏教という新たな思想の受容と、それを梃子として国家の形を整えようとする政治的意思とが、深く交錯している（写真9～12）。

寺の起こりは6世紀末、588年頃に始まり、596年頃に完成したと伝えられる。発願したのは、仏教受容を積極的に推し進めた豪族、蘇我馬子であった。創建当初の

写真10　飛鳥寺仏像（日本最古）

飛鳥寺は、今日の姿からは想像しがたい壮大さを備え、塔を中心に三つの金堂を配する「一塔三金堂式」という先進的な伽藍配置を誇っていた。その構成には、中国や朝鮮半島の建築文化が色濃く反映され、当時の飛鳥が広く東アジア世界と呼応していたことを物語っている。

本尊として安置された釈迦如来像、いわゆる飛鳥大仏

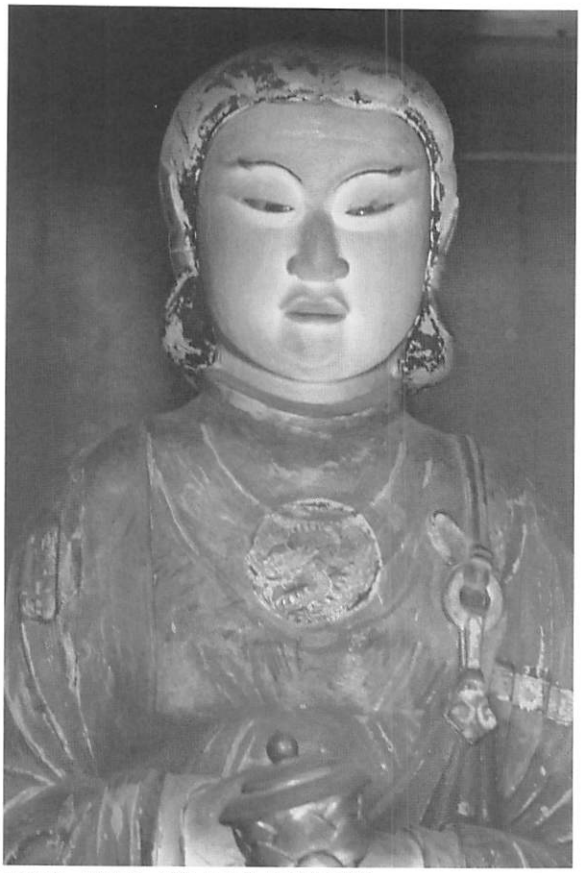

写真 11　飛鳥寺、聖徳太子 12 歳の時の肖像

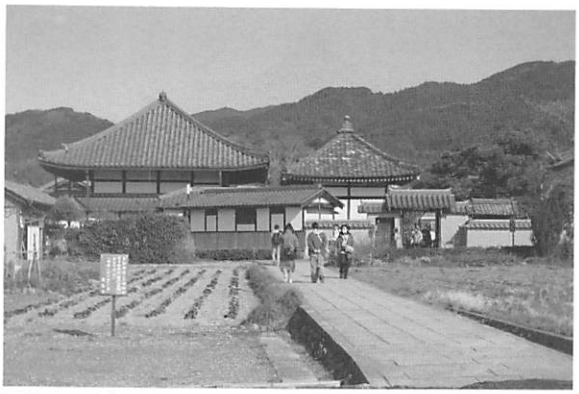

写真 12　飛鳥寺外観

写真 13　飛鳥寺、蘇我入鹿の首塚

は、日本最古の仏像として知られ、時の流れを越えてなお、その静かな威容を保ち続けている。

この寺はまた、聖徳太子という稀有な存在と切り離して語ることはできない。推古天皇の摂政として政にあたった太子は、仏教を単なる信仰にとどめず、国家の精神的支柱として位置づけようとした。飛鳥寺は、その理念が具現化された場であり、いわば新しい国のかたちを模索するための思想的中枢であった。

当時、仏教は政治と不可分の関係にあった。太子はその教えに内包される調和と慈悲の思想を統治の原理へと昇華し、「十七条憲法」にもその精神を刻み込んだ。飛鳥寺は、そうした理念が具体の空間として立ち現れた場所にほかならない。

さらに、この事業の背後には、蘇我氏の強力な支援があった。蘇我馬子と聖徳太子の協働は、王権と有力豪族とが結びつき、新たな国家秩序を築こうとする意志の現れであり、飛鳥寺はその結節点として成立したのである。

こうして飛鳥寺は、単なる宗教施設の域を超え、日本における仏教受容の原点であると同時に、国家形成の理念と実践とが交差する場となった。そこには、理想の国家像を思索し、それを現実の制度と空間へと結晶させようとした時代の息遣いが、今なお静かに宿っている。

7世紀前半、飛鳥の宮廷においてひときわ濃い影を落とす人物がいる。蘇我入鹿である。父蘇我蝦夷とともに、彼は朝廷の中枢を掌握し、蘇我氏の権勢を頂点へと押し上げた。

仏教受容を推し進めることで早くから政治的影響力を蓄えてきた蘇我氏であったが、入鹿の時代、その力はもはや均衡を失い、他氏族や皇族との緊張を不可避のものとしていく。皇位継承をめぐる対立の中で、山背大兄王を自害へと追い込んだ事件は、そうした専横の象徴として語り継がれている。

やがて645年、宮廷の儀礼のただ中で、入鹿の運命は断たれる。中大兄皇子と中臣鎌足によって企てられたクーデター、すなわち乙巳の変である。刃は一瞬にして権力の中枢を貫き、続いて蝦夷もまた自ら命を絶つ。ここに、長く続いた蘇我氏の専権体制は終焉を迎えた(写真13)。

しかし、この死は単なる一豪族の没落にとどまらない。政変ののちに始動する大化の改新は、天皇を中心とする新たな国家像を志向し、日本の統治構造に決定的な転回をもたらした。入鹿は、その転換を呼び込んだ存在として、歴史の断層に刻まれているのである。

後世の史書はしばしば彼を専制的な権力者として描くが、その像は勝者によって整えられた側面を免れない。仏教文化の導入や政治制度の整備に寄与した蘇我氏の功績を思えば、入鹿という人物もまた、単純な評価に還元されることのない、複層的な歴史の担い手であったと言えるだろう。

結論

大和王朝の成立とは、単なる政権の誕生ではなく、神話的世界から歴史的現実へと移行する過程そのものであった。語られる系譜と、古墳という物質的痕跡とが交錯するなかで、王権は徐々にその実体を獲得していく。その起源を一点に定めることはできないが、むしろその不確定性こそが、古代国家の本質を映し出している。王朝とは、時間の堆積の中から浮かび上がる現象であり、その成立は連続する変化のなかにこそ見いだされるのである。

追記:本稿校了後の7月26日、今回訪れた史跡を含む「飛鳥・藤原の宮都」が、ユネスコの世界遺産に登録された。

★2006年度・(財)住宅総合研究財団出版助成図書／★NPO法人外断熱推進会議推薦図書

これからの外断熱住宅

外断熱研究の第一人者が新進学者と共に放つ外断熱住宅の入門書

体裁／B5判・116頁・平綴製本・カバー付
定価／2,530円(本体＋税)

お茶の水女子大学名誉教授　工博　田中　辰明
お茶の水女子大学　博士　柚本　玲　著

本書の内容

はじめに
第1章／断熱について　外断熱工法とは、外断熱工法に種類、外断熱工法における留意点、外断熱工法の日本における普及
第2章／温熱環境　体温調節概要、人体と環境の熱収支、熱環境評価指標、予測平均温冷感申告PMV
第3章／熱と湿気　湿気を同時に解析する必要性、非定常熱湿気同時移動解析プログラムWUFIによる解析に必要な物性値
第4章／非定常熱湿気同時移動解析プログラムWUFI(ヴーフィ)　フランホーファー建築物理研究所について、WUFIによる解析の流れ、WUFI解析結果の読み方
第5章／外断熱工法の実際　外断熱工事事例、欧州における事例、欧州の有名建築物の外断熱改修、日本における外断熱建物の居住体験
第6章／外断熱に関する規格　外断熱工法に関する組織、規格
第7章／外断熱工法の今後の展望　地球環境問題、新しい断熱材
巻末付録　技術的な事柄／仕上の色は一般的に淡い色が望ましい、断熱材の繋ぎ方、断熱材の接着ほか
おわりに

ご注文はFAXで ▶(株)工文社
〒101-0026　東京都千代田区神田佐久間河岸71-3 柴田ビル5F
TEL 03-3866-3504　FAX 03-3866-3858　URL https://www.ko-bunsha.com/